

■洞薬会（北九州地区勤務薬剤師会） 1月度学術講演会
（2014/1/16, 18:30~, 会場；ステーションホテル小倉）

「パーキンソン病の最新治療」

産業医科大学若松病院 神経内科・心療内科 診療教授 魚住 武則 先生

[講演要旨]

パーキンソン病は高齢化とともに患者数が急増しており、特定疾患医療受給者数は全国で12万人を超え、交付負担額も難病の4分の1近く占めています。

抗パーキンソン病薬の種類も多くなり、昨年3つの新規薬剤が発売されました。

また治療に対する考えも大きく変わり、①理想的な **continuous dopaminergic stimulation(CDS)**を目指すこと、②運動症状だけでなく非運動症状（便秘、頻尿、血圧の変動、うつ、幻覚、認知機能低下など）に対する十分な治療をすることが患者の QOL を改善することが認識されてきました。

アポモルフィン皮下注はレスキュー療法として劇的な効果を示しますが、注射するタイミングなどの薬剤の特徴を理解することや、注射手技の習得のための練習が必要です。ニューロパッチは初めての貼付剤で、CDS の目的に合致し、とくに夜間・早朝の症状の改善に有効ですが、皮膚症状や剥がれやすさに対する指導が必要です。ノウリアストは世界初のアデノシン A_{2A} 受容体拮抗薬で、ドパミン作動薬と異なった効果が期待されますが、どのような患者に投与したら良いのか、まだ治験が不足しています。これらの新規薬剤が治療アルゴリズムに同様に組み入れたら良いのか、私見を述べたいと思います。

パーキンソン病に治療には多くの治療選択肢があり、これからも増えていきます。主治医からの一方通行の治療ではなく、主治医と患者さんとの共同作業で患者さんのライフ・スタイルに最も適した治療法を選択することが大切です。

そのためにはチーム医療（看護師、PT/OT/ST、薬剤師など）で対応する体制づくりがますます要求されています。とくに薬剤投与法が複雑となっており、薬剤師の患者に対する説明や指導が大変重要と考えられます。